九州産業大学国際文化学部紀要　第19号　1－18（2001）

後藤朝太郎の支那学の構想

石　川　泰　成

1　はじめに

戦前，中国についてのおびただしい著作を世に送りだし，また大いに読まれながらも，今は全く忘れ去られた人々がいる。こうした人々を支那通と呼ぶが，現在，この言葉にはいささか侮蔑の響きがこめられていることが多い。本論考で取り上げる後藤朝太郎もそういった支那通の代表的な一人である。かれの略歴は，1881年に愛媛に生まれ，第五高等学校卒業後，東京帝国大学文科大学言語学科入学，明治44年に卒業し，東大大学院へ進学した。その後，文部省，台湾総督府，朝鮮総督府嘱託を経て，のちに拓殖大学教授となり，終戦の年，1945年８月に没した。その死をめぐって謀殺説，事故説がある。号は石農といい，犬養木堂の命名による。彼の著書・編著は110冊を越える(注1)。

これほどまでに大量の著作を残しながら，一般にはいまや全く忘れ去られ，中国関係の学界においても知る人はわずかであり，それさえも「あのシナ趣味の」あるいは「あの反骨精神の」と懐古風に語られるのみで，彼の業績を学問的にうんぬんというわけではない。論者は戦前日本の対中国認識にはたした支那通と呼ばれた人たちの役割について興味をもち，彼の大量の著作物を読み，同じエピソードの繰り返しにつきあいながら読みつづけるうちに，「なぜに」の思いを強めた。「なぜにかくもシナ趣味の本が歓迎されたのか」という，つまり当時の日本が支那通とよばれる人たちからどんな知識を求めようとしていたのか読み手の心態への疑問であり，同時に著者の後藤朝太郎が「なぜに繰り返し同じ主張を繰り返さなければならないのか」という疑問とさらには「なぜ漢字研究の道を捨てて何を訴えようとしたのか」との疑問が私の胸に去来するのであった。ただ，最後の疑問に対しては，現在のところ，後藤朝太郎は決して漢字研究を放棄したつもりがなかったのだと考えている。

本論考では，後藤朝太郎の一連の著作に一貫した中国学の構想と意図を持っていたことを，彼の学問の遍歴の軌跡から論じようと試みるものである。

2　支那通ならびに後藤朝太郎評価

さきほど，支那通という言葉の響きがある種侮蔑をこめられていると述べた。概して支那通たちの学問的評価は低い。支那通ならびに後藤朝太郎の大正期から昭和初期にかけての役割とその評価について見ておくこととする。

野村浩一氏は，大正時代の日本の状況は欧米文化の流入に見られる舶来文化があふれた時代であり，中国および支那通達の役割について，「知的世界の真剣な対象ではありえなかった。それは，「シナ」の風土・人間という「シナ」の人情・風俗の，かなり興味本位な紹介が，かろうじて人々の好奇心を引いていたのである。」とのべている(注2)。ここでいう「かなり興味本位」なというのは，中国を神秘的な国としてとらえ，その猟奇的逸話，たとえば阿片，人身売買，売春といったたぐいを話題としたものを好んで扱ったことを言うのである。このかなり偏向した分野の異文化紹介者というのが同時に中国の正しい理解を妨げたとされ，現在の「支那通」とよばれる人々の低い評価の大きな要因ともなっているのである。野村氏の後藤朝太郎を含む支那通評価にはまだ奇形ではあれ当時の日本人に中国を興味をつないだというはたらきを認めるものであるが，中国文学の専門家からはむしろ嫌われる存在であった。たとえば，澤田瑞穂氏の次の発言にそうした見方がよく現れている。

> 一番困ったのは，それまでの中国の紹介が，みんな満州あたりにいった支那通あがりの日本人が，知ったかぶりで遊廓なんかの案内を書いて，そういう雑知識がフォークロアであるかの如く錯覚している，名前を挙げたら悪いけれども，後藤朝太郎みたいなね，いわゆる支那通型のものが多くて，それが民族学というものを何か汚らしいものにしておった気配があるんですよ(注3)。

しかし，興味本位なり，猟奇的，幻想・神秘的なものを求めたのは当時の読者であり，当時の日本の対中国への関心の在りどころが浮き彫りにされただけのことで，ただちに支那通の罪と断罪するわけにはいかないだろう。おなじく後藤朝太郎の著述が興味本位なテーマそれ自体を目的として著されたと即断するのも早計である。（まして，全著作に通底するテーマはそこにないことは，本論考のなかで明らかになるであろうが。）

沢田氏の支那通への嫌悪は，彼が現地調査に基づく中国民族学，道教研究を研究の一分野として学界に認知させた草創期の学者としての矜恃から来るものであろう。しかしこうした道教研究がさかんになったのは昭和も大戦期に入ってのことであり，後藤の中国学にフィールド調査の必要性，道教研究が中国研究に不可欠であるとの主張を提唱したのが明治末年から大正初期であったことを考えれば，上記のような断罪的

な評価は如何なものであろうか。早くは大正の末年から,「国人の信仰について民間習俗，迷信が人口の八・九割の信仰を支配している」(『支那文化の研究』大正14年，52頁）ことを指摘し「支那の学術研究といへば殆ど儒教そのもののみが一人天下の如き觀を呈して」(同上)いたが，その旧套を脱すべきことを述べている。民間習俗や道教研究が，学術研究の場にあってさえなかなか認知されなかったのを中国理解のために一般の日本人にも広くその存在を紹介した功績を評価すべきである。なるほど後藤の道教研究は，体系的ではなく，文献資料を軽視した傾向が強く，いわゆる「興味本位」で非学術的なのかもしれない。しかし澤田氏もその現地調査を満鉄，東亜研究所と関係しての官方にあって「学術的研究」を行えたまでのことである。その澤田氏がそれら現地調査の資料を生かして『宝巻の研究』を出版したのは1961年のことであり，戦後も十六年経過して後である。その成果は学界において不朽のものとなったが，日中戦争当時彼らの学者の研究がどのくらい一般の日本人の対中国認識に働きを及ぼしたかというならばゼロに近いものであったであろう。粗雑に，そして拙速ながらも日本人に中国・中国人の実像を知らせようと学術的領域から逸脱した後藤のものとは目的と読者対象が全く異なっていたのであり，澤田氏らとは同列に論じられないのではなかろうか。

3　漢字学の研究

後藤朝太郎がその生涯におよそ114冊の著作・翻訳を出版しているが，そのうち「研究」を書名に冠しているものは全部で５冊にすぎない。その他の100冊の大部分は随筆，啓蒙書，時局講演のたぐいである。その研究と銘打つ書名を挙げれば『漢字の研究』(1909年，成美堂版，1935年関書院版，1942年森北書店版)『支那文化の研究』(1925年)『文字の史的研究』(1930年)『硯及筆墨紙研究』(1930年）である。これらの書名から窺えるように彼の研究分野の出発点は漢字学であった。また明治期から大正初年の著書・翻訳書のうち学術的なものをみてみると，ほぼ明治期に学術研究書が集中している。

『言語学』(マックス・ミューラー著，後藤朝太郎訳，博文館，1907年

『現代支那言語学』(博文館，1908年)

『漢字音の系統』(六合館，1910年)

『文字の研究』(成美堂，1909年)

こうしてみると一連の漢字学に関する著作が彼の研究の出発点である。また，生涯に渉って漢字学研究の書物を公刊していくのであった。予期せぬ晩年（事故説，暗殺

説であるが）まで漢字学研究がライフワークである。さらに昭和17年には，字源研究の公刊を予言しつつ自ら，

この文字研究と云ふ金字塔の建設に向かって邁進し以つて多年水村山郭の行脚に獲たるところを役立たしめ総合的の集大成を心私かに画している次第である。（『文字の研究』，自序，昭和17年）

と述べている。以上のところから，まず彼を漢字学研究者として位置づけることが必要であると考える。

専門家としての後藤朝太郎の明治期における漢字音研究への評価は相当高いものがあったのである。『日清字音鑑』の編者でもある言語研究者の伊沢修二(注4)は，後藤朝太郎の『漢字音の系統』に序をよせて，

古来漢土に諧声を論じたる書少からず。彼韻譜諸書の如き汗牛充棟も啻ならずと雖も，科学的に漢字を解剖して音部の要素を抽出し，その系統を明らかにせんと試みしは和漢にその人なかりしは言を待たず。西人中にも未だその比あるを聞かず。余の如き多年苦心を抱きしも遂に成らざりしに，今この書の出づるを見て欣喜極まりなし。（『漢字音の系統』伊沢修二　序）

また，言語学者上田萬年(注5)も序を寄せて，彼の研究が漢学者を瞠目させ，ヨーロッパの学者たちも構想の点で及ぶことが出来ない優れたものと最大限の賛辞を贈っている。そして序の最後を，

我輩は後藤君の著述を見るたびに，我国に新研究の興つて来るのを大いに喜び，併せて，我が文科大学内に東洋学の健全なる基礎が漸次置かれて行くのを賀するのである。（同上書，上田万年　序）

と二十七歳の青年に最高級の期待を示してしめくくっている。五高時代の恩師，市村讃次郎(注6)も，

余は更に君が字体に関する研究を公にして本書と並び行はしめ且つ他日漢字の学を大成して学界に不朽の功績を留めぬことを望む。（同上書，市村讃次郎序，明治42年５月21日）

と漢字学での大成を期待していたのであった。

ではここで，後藤朝太郎の漢字学研究の概略について見ておくこととしよう。漢字の研究が大きく分けて形・音・義の三分野に大別され，形については，『説文解字』の解釈の正解を追求することを媒介として，漢字の起源に迫ろうとする説文学に代表される研究法があった。音については音韻学があり，義については，訓詁学というそれぞれに専門の門戸が立っていた。ところが，殷墟から甲骨文の出土，或いは漢代の木簡，帛書などの新出土資料により，

従来鐘鼎碑碣の類のみを文字資料の雄なるものとしていた時代に比ぶれば今日は実に幸福なる時世である。而してこれら豊富なる材料を生かせると，否とは一つに研究法の如何に拠るのである[注7]。(『文字の沿革』11頁)

と研究の方法論，結論ともに変更が迫られていたのが明治末年の状況であった。こうした中で高田忠周，林泰輔がまず新しい漢字学の端緒を開いたのであったが，彼らの業績は主に収集，整理の段階にとどまり，漢字学に関する個別論文もないわけではなかったが，方法論の提示やそれに基づく体系的研究にまでいたらなかった。言語学を専攻していた後藤朝太郎は，従来の漢学の手法よりもマックス・ミュラーなどの西洋言語学を学んだ影響か，方法論を有しなければ科学的学問の名に値しないとの考えがあった。こうしたとき，最初にとりかかった漢字音の系統問題(音韻体系と変化法則)の解明はまさに最適の組織性を持つ対象であった。

この後藤の『漢字音の系統』は，同時代の先輩らの序文に寄せられた高い評価と期待が示すように，当時としては漢字研究の新しい可能性を開いたものであった。岡井慎吾は『日本漢字学史』のなかで，

漢字音の系統は後藤朝太郎学士の著で明治四十二年六月の出版。学士は東京帝国大学言語学科の出身で，漢字研究の旧套を脱して新立脚地から之を観察せられた為にその将来を期待され…[注8]

と述べ，明治四十年代という時代に「二十八歳の新学士の業績としては真に人をして愧死せしめる」(同上) として朝太郎の才能と業績を認めている。

さらに進んで，漢字の古代音の体系，形・音・義の総合的解明には遡及して漢字の起源を解き明かす必要があった。従来の説文学にみられる文献操作や思いつきだけでは正解を得るのは無理だとの結論を出した彼は甲骨文の出土に新しい漢字学の可能性を読み取った。考古学的新発見が後押ししてくれているなかでそれをどのように活かすかが問題となる。そこでそれらを最大限利用した漢字研究の方法論を提示してゆこうとする。

そこで，新しい文字学の構築を目指し，「1神話伝説 2土俗人類学 3絵画及模様の研究 4言語学 5歴史学 6心理学 7文学」(『文字の研究』237頁) を補助学として新たな文字学研究法を提唱するのである。しかしながら，構想を実際に移してゆくうちに，

しか云ふ自分自身も年来支那文字のことを専門にしていながら支那の実際には甚だ貧弱な知識を持っていた[注9]。

と告白せざるを得ない自分に反省し，以後積極的に中国に出かけてゆくことになる。そこで実際中国で眼にしたものは，山西省はじめ陝西，河南，山東各省には礼記等に見える古代の風俗が保存されており，実地での観察が漢字研究の重要な要素となるこ

とを発見し,「僻地の土俗及び伝説の実地研究が，これ又少なからぬ要素となるのである(注10)。」と述べている。彼自身，説文会という江戸時代から続く漢字研究の研究会に参加し，伝統的な漢学的手法も習得していたのであり（『文字講話』449頁），文献操作を主とする従来的手法で業績を上げもしていた（『文字の研究』所収「支那古韻K，T，Pの沿革と由来」など)。しかし，今見た彼の発言から考えると，彼自身中国へ出かけてゆくのは自分の学問的欲求と新しい漢字学研究の実現のため必要欠くべからざるものであり，彼の学問的良心に忠実に従い行動したものであったのであると言えよう。

ただ，こうした朝太郎の行動は，周りからは理解されなかったようである。少壮の業績をあれだけ讃えた岡井慎吾は,「近来は筆よりも他に親しまれるは学界の為に悲しむべきことである(注11)。」と言い，これがまた学界での評価でもあった。しかし,『文字の研究』の昭和十七年の再版にさいして,「岡井慎吾博士の高著日本漢字学史中には自分の文字書の著述中絶して支那に遊びたるを文字研究上悲しむべきことなりと特筆せられているのは恐れ入った。博士は悲しまるると云はるるも，自分としては益々幾万の文字が実際の風物地理との密接の関係ある事実を発見せしこと多く，心私かに寧ろ聊か快哉を覚えているくらいでいるのである。」（同上書1309頁）と朝太郎自ら反論を加えているが，その内容は漢字研究のための中国行きであったことを裏付けるものであろう。

以上，彼の文字学の研究の特徴をまとめておくと，

(1) 現地調査の重要性

(2) 甲骨文字の解読の重要性

(3) 各学問領域の総合的研究の必要性

を挙げることが出来よう。こうした方法論は，けっして荒唐無稽なものではなく，漢字の字源・語源研究は，戦後，加藤常賢，赤塚忠氏らの研究によって長足の進歩を遂げたが，その研究姿勢は，宗教学・民族学を補助学に用いたものであり，今でこそ「三つか，四つの異なった分野の研究によって，初めて一枚の甲骨の意義が明らかにされるのである。一種の総合学，現在では学際的研究という。」（『中国学の歩み—二十世紀のシノロジー』102頁）と認識されるようになったが，明治末年にその方向性を見いだし実践したのは，炯眼と称されるべきものであろう。また漢字研究の新構想には道具としての筆紙墨の研究と書学をもを並立して研究すべきことを論じており，のちにその方面の著述も多くなされている。その専著としても『硯の栞』（白水社，1921）『翰墨談』（富士書房，1929）『硯及筆墨紙研究』（雄山閣，1930）『翰墨行脚』（春陽堂，1931）『文房至宝』（雄山閣，1937）『書道用具の心得』（峯文荘，1939）『支那書道』（黄河書院，1943）と7冊を教え上げることができる。彼にとっては大きな構想の基に行なっ

た当然の研究すべき分野であり，文字研究の一環であったのである。

3-2　甲骨文研究

本来，彼の漢字研究，新しい文字学の構想にもとづいて出された成果を漢字学の立場から考察すべきであるが，その全容は別稿にゆずるとして，ここではいくつかの特色について述べておきたい。

さきに甲骨文の解読に漢民族のほか，アジアの周辺民族の南洋・台湾の原住民の風俗などの民族学的知見を例証に用いながら漢字の起源を解き明かそうとしたとのべたが，その成果の一つとして，『文字の沿革』（成美堂，大正4年）で分析している建築に関する字源研究があげられる。そこでは，漢字の「平面を写せる建築関係文字」と「立面を写せる建築文字」「平面立面混用の建築関係文字」の原則を立てて考察してゆき組織的研究を目指している。一例として平面を写したものとする「亜」字の解釈を見てみよう。元来『説文』などでは「亜」字は，人の曲がった背中の形にかたどったものとしていたが，かれは，建物の平面を写したもの，特に宗廟など儀式を行う場所を想定している。まさに「前人の未だ嘗つて説いてゐないことで，自分自身も未だ十分断定できる程に研究し尽くして居るのではない(注15)。」というが，現在では「陵墓」の形に基づくというのが現在有力な説である。しかし平面を写したという象形法はいまなお有効であり，かつまた字源研究に宗教性を考慮したのは，まさに後藤朝太郎が提唱した考古学的，宗教学的成果を取り入れた漢字学という意味では漢字学研究史上位置づけられてよいものといえよう。

また，「立面を写せる建築関係文字」から「京」字をとりあげよう。『説文』では，高い岡と解釈されていたが，甲骨文によって高いアーチ状の建物を想定している。これもほぼ現在の説である。「平面立面混用の建築関係文字」から「市」字の解釈を見てみよう。『説文』では「囲った場所に，物が集まる」として「巾」を「及」の古字としているが，朝太郎はマーケットに周垣（かこい）があり，そのなか目標となる旗なり，樹木なりを立てたもの」と解釈している。また「内」字の解釈を見てみる。『説文解字』では「入るなり」とし，建築と関係ない会意文字としているが，朝太郎は，内字の古音nap，dapとその畳字dap，tapと同音とし，意味の相似(上下・内外に二者重なる義)を説き，字形では，家の戸口を象ったものとしている。ここに音と形の総合的解釈が見られ，現在の研究でもほぼ，それに近い解釈が行われている。当然，今日の，漢字学研究は長足の進歩を遂げ，現在の学説，解釈からみると的外れなものも多い。しかし，甲骨文解釈に諸知を総合して，考古学などの現地調査の成果を重視したのは漢字学研究史に特筆されてよいのではないかと思う。

3-3 俗字研究

当時，新出土資料の甲骨文，殷周の古銘によって漢代以降の文字研究を正すというそれ自体斬新な研究法を採用しようとした彼であったが，一方で漢字研究の新しい研究法として，当時民衆で通行している俗字を「現代の漢字」と呼びに注意を払うべきだという。なぜならば，漢字は「生命力」を有し，歴史とともに変遷する性格を持っていると考えた。よって，現代の漢字の形音義の用法にも当然注意が払われることとなる。中国での俗字の使用法が大正７年『支那の文物』で紹介され，昭和７年の『文字の史的研究』に紹介されるなど，当時としては，漢字の規範問題，正字問題でより厳格化を指向するなかで，俗字を考察の対象として積極的に取り組み，漢字の使用制限の提唱簡化字の使用を肯定するといった漢字教育へもいくつかの提言をしていることは，大いに注目されるべきであろう。(果たして，彼が漢字問題で提言した字数制限と世間で通用する略字の正式使用はのちに中国大陸で実施された。)

この俗字肯定論は，彼の対中国認識に基づくものであった。それは，知識人という中流階級の欠如が中国社会の欠点であり，俗字肯定による教育レベルの向上を通して，中流階級を育成し，その彼らが新しい中国を作り上げる主体となると考え大いに期待していた（『支那の文物』ｐ９～10，大正７年)。

つまり，従来の中国は漢字のために中毒して，国の発展を阻害する原因とさえなっているとし，略字，音表文字が盛んにならないかぎり，国民の力を得るという時代にならないと考えたからである。従って，新しい中国，中国再生のためには，「若しそのやうな簡体字で用が達せるならば，支那の俗間は余程進んだものである。支那のために結構な次第であります。」（『おもしろい風俗の支那』184頁）と，新しい中国のために俗字使用を積極的に評価するのであった。もし「生命力」を失いながら，文字偏重の文化・民族性をもつ現在の中国のままであれば，いづれ自国文化に押しつぶされ，その結果「支那は文字があって国が亡んだといふ批評を下しても，支那人はそれを否むことが出来ない」（『おもしろい支那の風俗』295頁）という民族にとって重大な結果を招きかねないという朝太郎の危機認識に基づく提言であった。

4 文字学からシノロジーの構想へ

ここまで，朝太郎の漢字学の構想とその研究の一端を見てきたが，彼はこの漢字学研究が最終的目標とは考えていなかったようである。早くは，明治の末年に，

> 所謂支那のシノロジー（chinology）の建設には又その古代文字の根本的研究が与って大いなる力を致すべきことは信じて疑わぬところである。（『漢字音の系統』

154頁）

と，漢字研究はあくまでシノロジー(支那学)，今でいう，中国学研究のための基礎学として重要であると認識していたわけで，最終的には，中国学建設を構想していたのである。シノロジー（支那学）といえば，内藤湖南が京都大学において漢学と明確に決別した際，この名称で中国学研究を提唱していたが，同時代に同様の考え方からシノロジーを提唱していたことは興味深いものがある。さて朝太郎は，従来との漢学との区別をどのように考えていたのだろうか。

最近の日本の世態は漢学勃興の気運に向かつて来て，孔子教，漢文研究，漢字研究など一として唱導せられないものはなきに至つた。漢学の復興は古典学の普及に関連するものなれば，日本学界のため一大快事である。ただ吾人の最も注意すべきは此の際此の支那研究が従来の漢学の謂ではなく最近の文明的にして，科学的なる研究方法に拠れるものとならんことを希望する次第である。(『文字の研究』1174頁）

と科学的研究方法の確立の有無を以て区別するものとし，科学的方法論を有する支那学を模索していたのである。これは，彼一人の考えではなく，恩師市村讃次郎とたびたび「シノロジー」構想を話し合っていたようである。

そのシノロジー全体の概略は，

古代支那の研究

1　北部支那の地理踏査

2　土俗及伝説の研究

3　言語学的の研究

4　考古学的の研究　附人種上の調査

5　文献学的の研究

6　文字学的の研究

の六分野の研究から構成されている(注16)。また，大正期の中国学を「改造期にある支那学」と位置づけ「茲に支那学とは，従来の支那の経学，歴史，文学の三つの学問の外に，更に新しい支那を土台とした実際方面の研究を含めたい」(『支那文化の研究』15頁）とし，実地調査の重視主義・現地主義・民族心理の理解の重要性を主張している。なかでも，中国研究とりわけ古典研究の注意事項として次の九項目を掲げる(注17)。

一，実際の支那民族の特性を看破すること

二，実際の支那の土地山水を見て来ること

三，実際の遺跡遺物の現状をたしかむること

四，実際の風俗人情を習慣を見て来ること

五，実際の支那芸術の偉大なるところを見て来ること

六，実際の支那人の衣食住の生活を見て来ること

七，支那の社会情態の実相をたしかむること

八，支那社会の暗黒面を確かむること

九，支那人の歓楽生活に浸ってみること

こうして全体の構想を立てた朝太郎は，以後その実践を自ら課して実践したものといってよい。もちろん，従来の伝統に根ざした「漢学」を完全に否定するものではない。しかし単に「古典」研究としての価値であり，上の表の5「文献学的の研究」という一分野に過ぎない。それを全部として扱う日本の中国学の現状に問題があるとするのである。従って名称も「支那学とでも改称した方が，其の実にかなふ訳になるのである。」(『支那文化の研究』65頁）と漢学との決別のため戦略的に変更を考えていたようである。

しかも，漢文教育は中国理解をゆがめるものとして悪影響があると主張し，加えて漢学と結びついたかたちで教育の現場で「漢文」が授業に取り入られて，青少年に隣国中国への興味を失わせている現状を指摘するのである。ゆえに機会をみては「漢学」と「漢文教育」批判を行ってゆくのであった(注18)。

4-2 漢学批判

彼の漢学批判は漢字研究を従来の漢学的手法の限界を痛感した後藤朝太郎は，現地重視の研究態度の傾向を強めたことは前節で見たとうりであるが，それとともに漢学，漢文批判が強まったものと思われる。

「古来日本人は支那の知識を得んとするに多く古典より這入る。」(『支那文化の解剖』280頁)のであるが，古典を中心とする文献操作を方法論とする漢学が主流の学界および学校教育で漢文教育が日本人にとって唯一の中国理解の機会であるならば，そこで結ばれる中国・中国人像が現実の中国と没関係なものであり，むしろ中国理解のために障害ともなりうると彼は考えた。もし，漢籍の中国を中国と見るならば，「併しながらそれを以て神髄を捕まへたものと考へるのは非常なる誤りである。」(同上書，276頁)と言う。さらに，当時，中国に対する一般の関心は高くなく，漢学を取りまく状況は，

1　漢学が今日的政治的意義を失ってしまったこと。

2　現在，漢学を修めた人，長じた人が社会的地位が良い位置を占めていないこと。

3　中国および中国の学術自体が欧米に比較して価値が低いと見られていること。

4　現在の中国の政治的不安定さと日清戦争での中国側の敗戦が，中国を劣等国とみる見方が多いこと。

5　中国人に対する風ぼうなど，無理解に基づく蔑視があること。

6　書籍，言葉が難解だと思われていること。

とし，その中でも漢学が上記の理由の過半を形成しているとして強く批判するのである。その結果，「青年の心を引かざる支那の学術」（『支那文化の研究』21頁）となっており，今後，漢学研究は，

> これらの方法には誰も寄りつかなくなるであらう，即ちそれ等の頑固な研究は自滅せざらんと欲するも得べからずで，その運命は知るべきのみであるといふことを注意しておきたいのである。（同上書，34頁）

と研究法の漢学の運命を予言したのであった。しかし，その命運尽きたはずの漢学が国策として当局者達によって利用しようとする時，朝太郎はどのように対応したのだろうか。

手許に『日本の儒教』という日本儒教宣教会が編集した本がある(注19)。日本精神の作興のため儒教の翼成を期して日本儒教宣教会が設立されたときの祝辞，感想を集めた記念出版物である。発会式での加藤政之助大東文化学院総長，貴族院議員の式辞によれば，現代文明は精神文明を軽視し，物質文明に偏重したため，その害毒（個人主義，功利主義）が蔓延した状態となったとし，「左レバ此害毒ヲ一掃シテ日本ノ天地ヲ浄化スルノ道ハ皇道，国体に醇化セル儒教ヲ宣揚シ伝統的仁義忠孝ノ感念ヲ喚起スルコトガ第一デアルト存ジマス。」（8頁）との思いのうちに大東文化学院に儒教宣揚会を結成し，運動の全国展開をはかったものである。これに当時の内閣総理大臣斎藤実が「国民精神作興ノ為メ人意ヲ強クスルニ足ル」（11頁）と祝辞を寄せてこの運動を後援しており，このほか内務大臣山本達雄，文部大臣鳩山一郎，宮内大臣湯浅倉平応ほか貴族院議長近衛文麿，衆議院議長秋田清ほか歴々たる人物からも祝辞をよせている。それも，文部大臣列席の上，自ら祝辞を読み上げている写真を掲げていることから，政府公認の，いわゆる政府の肝いりによるものであったといってよい。こうした官製の創立記念文集に寄せられる所感，所懐は共鳴を表すものの寄せ集めであり，中国研究者のものもほぼ同様である。（じつは子細に読むと，各個人いろんな温度差があり賛意を示しながら何も語らないという消極的抵抗や確かに史書で確認できる学術交流の史実のみ挙げ，研究の重要性をいうという学術性に隠れる抵抗という各人それぞれのスタンスがあるのであるが，）こうしたなか，後藤朝太郎は，「日本儒教に大陸情緒を加味せよ」と題して，

> 日本精神勿論悪くないが心境に常にゆとりを持ち，大陸的気分を持つと云ふ修養を積んでゐたいものである。向かふ所敵なしといきり立つばかりではいけない。（中略）日本儒教には教化と云ふことが眼目となつてゐる以上，そこには精神的

になだらかな水村山郭酒旗の風と云ふやうな江南情緒の何ものかが加味されてほしいものと思ふのである。日本の神威を輝かすには，反面にかう云つた大陸情緒のゆたかな雰囲気を必ず随伴してゐなくては本当ではあるまいと考へる。

日支満三国提携が東亜否世界に向つて進路をとる大事な事である以上，どうしたつて日本式のみで行けるものではない。(中略)ところが民意，人心と云ふものは形式とか法律とか乃至は武力とか云ふものから遙かに超越してゐるものであることを，どこまでも念頭においてゐなくてはならぬことと思ふのである。この点は耳のいたい人もあるかも知れぬが，百年の大計はここにあると云ふことを付言しておきたいのである。

と，語っている。日本の漢学研究が正しい中国理解をもたらさず，日本精神と漢学が結合した「日本儒教」なるものが，大陸進出を支える精神的背景として高唱せられる時，彼は反骨とも言える姿勢で，漢学を風刺するのである。その漢学への態度は，確信的反抗のものさへ，読み取れよう。なおこの『日本の儒教』の冒頭の写真版の第一葉に何を措いても宮内大臣湯浅倉平の加藤政之助宛て書翰が載せられており，

「一　日本之儒教　壱冊

右

天皇陛下へ献上被致候ニ付

御前へ差上候

此段申進候

昭和九年七月十三日」

とあり，昭和天皇の御前に献上された本である。そこに大陸情緒を加味してゆこうなどとは彼の思想が漢学批判という学術問題を越えて政治批判として捉えられかねないものであったと思われる。

5　シノロジーを越えて

互いに鎖国していた頃ならともかく，隣邦として付き合っていかねばならない日本と中国は，決して平坦なものではなかった。特に大正期以降のアジアを含む国際情勢は，中国と日本とにおいて外交・政治上の難しい問題を次々と抱えることとなった。後藤朝太郎はいう。

民国と日本とは共存共栄で行かなくてはならぬ。親しみのある諒解がなくてはならぬ。(『おもしろい支那の風俗』序，大正12年７月)

というが，現実の日中両国には，山東問題，排貨などで問題山積である。これも「根

本は感情の問題が基礎をなしている。」(同上書，同頁）のであり，その根底には日本人の中国理解の欠落を理由にあげる。したがって，漢字研究に端を発した中国の総合研究から，日本人に対して中国という異文化理解のための案内人としての意識を朝太郎は明確にし，著作をするのであった。つまり，

> 日本人の支那を軽んずる主因は支那の風俗人情趣味の理解がないことに在る。よく事情が判ってくると自然に興味が湧き起る。自分はこの意味からして料理，風俗，趣味の姉妹編を公にして多少なりともその間の緩和剤に資したい積もりである。(同上書，２頁)

という。したがって，従来まさに自分の興味に任せて，趣味的内容の本を出版し続けたかにいわれるが，決してそのようなものではなかったのである。

> 自分は必ずしも文化方面の闡明のみを以て支那学の任務目的の全部とはいはぬ。けれども現時ほど，両国の事情の宣伝と文化の闡明とを急務としてゐる時代はない。自分は又今日支那学の文化研究を以て世に阿る為めのものとは露思つてゐない。否，出来得べくんば，我が国の国是として，今日，学問としては徹底的に組織的の自由討究を起こし，更に実際問題としては将来の国民に隣国の文化の状態を了解せしめる為め，教育上から之が国策を立つべき時ではないかと考えてゐる次第である。(『支那文化の研究』68頁)

あるいは，

> 行詰まれる日本の此のいらいらした情弊多き現状を開展せしむるには政府筋や政党屋などばかりを当てにせず国民自ら目醒めて大きく支那南洋北亜にと目を転ずべきである。殊に日本の常識や推測で行かぬ支那の事に対しては最も重を支那民族性におき先づ其の生活文化の向上の闡明に深き趣味を持つて進むことが何より肝腎である。此を自分は研究上の最も力あるモットーに翳して行きたい考である。
> (『支那文化の研究』著者序後に又しるす)

などの発言から見ると，支那学の使命の一斑として，両国の理解の促進を，あるいは当時喫緊の問題解決を，自らの責務として引き受けようと考えていたのである。

はじめ，頻繁に中国に行き漢字学のための各種材料を採集したのであったが，そこで触れたのは現実の中国の風土であり，生身の中国人であったのである。学問的立場から，資料採集を積み重ねてゆくうち，かの地で見えてきたものは日本人の中国人への徹底的無理解であった。たとえ，中国に関する書物があっても，「邦人の対支観察記述といへば，常に政治，利源，経済の範囲に彷徨し，昔流の治国平天下の談論の域を脱することは幾何でもない。」(『支那文化の解剖』及び『支那文化の研究』，120頁）といい，当時行なわれているほかの文化研究のものも現実の中国と遊離した，実地観察

の欠如，貴族文化の重視と庶民文化の軽視，都市生活の重視と田舎の民衆生活の軽視，珍奇な事項への偏重（日常生活の軽視）といった欠陥点を持つものとしている。こうした状況下では，

> 其の為に万人が万人唇歯輔車だとか，一衣帯水だとか，極めて心易い言葉で両方の関係がとらへて居るにも拘わらず，お隣の事情を知らずに居る(『支那文化の研究』133頁)

といった状態で，これでは「故に支那に対する熱のある同情も起こらねば，本当にこれが支那の真相であるといふ紹介も出来ぬ。」(同上書，135頁)と，これら日本の中途半端で真相に至らない理解は，政府の対中国政策も，中国人留学生の減少，日中の貿易もうまく推移しない現実となって現れているという。其の原因は「国民全体がつくり出したものだと自覚しなければならない。」(同上書136頁）という。

こうした無関心，無理解という日中両国に横たわる深い溝を文化研究を通して埋めようとしたのが後藤朝太郎なのである(注20)。

5-2 文化主義者としての後藤朝太郎

日本と中国の相互の理解をはかるために，シノロジーといった学術研究の枠をこえて活動したかれは，政治・経済などの面よりも文化の力を信じる文化主義者であった。共通の趣味という基盤をもつ日本と中国にたいして，文化の力を信じ，中国絵画展，硯展の開催を行っている。

いえることは，この時点で新中国への期待，変わる中国を期待していたのであって，「変わらない中国」だけ見ていたという後藤朝太郎批判は当たらないのではないだろうか。あくまで「変わらない」中国を共時的民族論の抽出のため有効であるとし，当時の中国の民族性の根底に横たわるものとしてみていたのである。大正７年発行の『支那の文物』あたりまでは，日本文化の源流としての中国理解の必要性を強調している。（『支那の文物』５頁）ただし，そこにすでに後藤朝太郎の「中国人論」が展開されており後に大量の中国論（民族性論・文化論）著述の基本ラインが現れているといって過言ではない。

いままでの支那通として興味本位に中国を語るという評価をはずして，この過去・現在・未来を貫く文化の力を信じた文化主義者として後藤朝太郎を捉えるなら，大正末年から昭和初期にかけて，特に昭和５年前後から中国日本の関係が緊迫すると著述の重点も中国風俗紹介・中国趣味，中国人論ものに傾斜してくるが，これらも新しい中国研究のなかに位置づけられた一部門現実の中国を知るという前節の九ヶ条の実践展開であると同時に，支那学研究の目的と意義に「両国の真の理解」を位置づけた彼の

一つの学問良心に基づくものであったと再評価しても良いようにおもわれる。次に，彼れが文化主義者として中国文化論を基盤として中国と日本の緩和剤となろうとした点について見てゆくこととしよう。

5-3 「支那趣味」と民族性

もともと圧倒的文化の影響をうけながら，その源流の中国に対して全く無知な日本人に対して彼は危機感を持ったわけである。

> 日本人の支那文物に対する観方には二派あるやうに考える。一つは支那の文物は有りがたくてたまらない。(中略)今一つは支那の文物と云へば，一にも二にもあたまから馬鹿にしてかかる。(『支那の文物』217頁)

というありさまで，馬鹿にしてかかるのはもちろん，中国の文物に対して憧憬する人も自分本位な思い込みであり，正しい中国理解に基づかない点では同じであるのである。

日本には「支那趣味」の伝統があり，単なる異国情緒，あるいは好事家として，鑑賞者なりは，自分が一体誰なのかといった問い掛けなしに，自己の心性の延長に対象が有るといった受容の仕方も「支那趣味」であるが，朝太郎が支那趣味と呼ぶものは，中国人の趣味の意味であり，「中国人の趣味」を趣味とする我，「中国人の趣味」を理解する我という立場が大切だとのべる。

> …日本人の眼には確然日本の国民性から区別されべき国民性が認められ，また趣味から云っても矢張り支那特有の趣味が存してゐるやうな気がする。(『支那の文物』 4頁，大正7)

といい，「支那趣味」理解は異文化理解のための適切な対象と位置づけている。また，

> 支那文物を見て行く上に一番初めに知っておく可きことは支那人に主として著しく見出される所の民族性のことである。…支那人は抑も如何なる国民性を有するかと云ふ点，是が眼目である。(『支那の文物』 6頁)

こうして，他者感覚をもって中国を見てゆき，「中国人が趣味とする中国趣味」を我々が理解する必要性が中国という国家，中国人という民族性を理解するうえで最も有効であるという。つまり，

> 相手方の心理作用を察すべき大切な方法を無視するような者は仕事も研究も成功する筈がない。この意味に於いて支那民族の心理，個人的の人情の機微を察するがためには，古来その無意識の間に露はれてゐる支那趣味なるものをよく窺つて見ると云ふことが一番適切であり且つ興味の多いことと思ふ。(『支那趣味の話』序文，大正13年，9月，大阪屋号書店)

こうしたテーマを設定したさい，ふつう文献に現れた資料を中心に研究するのが一

般的方法である。これで本当の中国理解を得られればよいのだが，文字資料に表されたものは多くは上流階級のものであり，この手法では先にもみたとおり漢学的限界を越えられない。そこでその手法を意識的に採らない朝太郎であった。また，

> 然らば支那には上流と下流との外に中流の社会と云ふ堅実な階級があるかと云ふに此れは殆んど全く無いと云つても過言ではない。所謂知識階級なるものは国家の中堅として必要欠くべからざる社会であるが支那には此の階級が欠けてゐる。（同上書8頁）

との認識を持つ後藤朝太郎は，文献学的研究よりも中国国民の大多数を占める下層民を対象にして観察することが大切であると主張する。たとえば，

> その国民性の事を述べんとする時はむしろ大体においてその大多数のもののあらわす状態から考察すべきものと思ふ。（『支那の文物』10頁）

という。彼らを対象に得られた中国論とその反照によって得られた日本人論が後藤朝太郎の中国人論ものの中核をなすのである(注21)。

彼の文化研究の姿勢は今まで見てきたところでもわかるように現地観察を重視するものであるが，その中国という異文化との接触に対して，彼の自体は旅行者として，採訪者として触れ合うのであった。もちろん，中国滞在中は，中国人と同じ服装，同じ宿，同じ食事を取り，「支那に行つては支那気分になり，多少でもその呼吸で趣味的に味はつてくることをプリンシプルとするやうにしたいものである。」（同上書250頁）といい，実際それを実践していたのであった。しかし日頃中国人になり切り，中国人の心理までも理解しようとする朝太郎であったが，必ずしも風流におぼれる事はないように務めていた。次の発言は，後藤朝太郎が支那通として対象と適切な距離を保てなくなったと見る向きには驚きであろうが，

> 吾人は支那の土地を遊歴して廻る際し，あまりに古の因縁故事にのみ深く拘泥したり，或は風流の道に深入りして平仄の韻事に没頭したりして，それから脱することを知らぬまでなつて了ふことは，餘りに風流過ぎて，遊歴の進行を妨げる虞があることを知つてゐる。されば出来得る限りあつさりと見て過行くことが肝腎だと考へてゐるのである。」（『支那文化の研究』248頁）

と対象への過度の惑溺を戒めている。

つまり「支那気分」「大陸気分」に浸りながらあくまで「旅行者」であることを通した彼の異文化への接触態度は，同年代の支那通達，渋川玄耳や村上知行などが中国に滞在十年，二十年と生活し，現地に同化した生活者としての視点を持って著述したものとはかなり論調が異なり，自国日本への文化あるいは日本民族への反照，自己認識をも深める作用を持つものであり，彼の日中民族比較論の基本的視座を形成する大き

な要素となっている。

ただし，彼が新しい支那学の構築が文化心理の研究に重要視したが，日中両国の緩和剤，理解の掛け橋として，一般の人への啓蒙を祈念した著述を増すにつれて，文献研究を重要視しない姿勢は，当時の学界側からはその成果は，食い足りない「漫遊記」としか認められず(一般読者の対中国観政府の対中政策にも影響を与えられず)，かつ他者理解のために中国気分に自ら浸る点からは対象に淫するものとして学術的客観性を著しく損わせたものとの評価を招くこととなったのであった。そこに後藤朝太郎の低い評価の原因があるようである(注22)。

6　おわりに

本論考では後藤朝太郎が単なる他者感覚のない「支那趣味」の大家として中国を紹介をしたのではなく，そこには「新しい漢字学」，新しい「シノロジー」といった学問を構築するべく自ら実践していたこと，大量の支那風俗のものも日本人への対中国認識を変化させる必要を感じてつくられたものであることを論じた。また後藤朝太郎は文化の力を信じる文化主義者として捉え直せるのではないかという提言である。また大量の著作も一度彼の学問構想の展開なかで位置づけ直して考察してみる必要性の提言である。

今日大量に残された朝太郎の中国風俗の現地報告や日本人論は現在ほとんど論じられることもない。彼がライフワークとしていた文字研究さらには新しい中国学研究のの構想とその成果といった正当な業績，あるいは，戦争協力者として捉えられかねない中国進出の煽動者として読まれかねない著述の負の成果もふくめて再度，検証しなおす必要を論者は認めるものである。大いに読まれ，全く忘れ去られた彼へ，今まだしばらく注目してみたい。

注

(注１)　劉家鑫「後藤朝太郎・長野朗　子孫訪問記および著作目録」(『環日本海論叢』第14号，pp.39～43，新潟大学環日本海研究会編，1998，１)に著作目録が編まれており大変有用である。それによれば朝太郎の著作等は全部で114冊にのぼるという。

(注２)　野村浩一『近代日本の中国認識』(1981，研文出版) 80頁

(注３)　『幻想文学』44 (1995，６，20，アトリエOCTA) 18頁

(注４)　伊沢修二 (1851～1917) について詳しくは埋橋徳良『日中言語文化交流の先駆者』(1999，白帝社) 84頁～参照

(注５)　上田萬年 (1867～1937) 国語学者，東京帝国大学教授。

(注６) 市村讃次郎（1947～1964）東京帝国大学教授。

(注７) 『文字の沿革』（1916（大正５）年 巖翠堂）11頁

(注８) 岡井慎吾『日本漢字学史』（昭和９年９月，明治書院）419頁

(注９) 『支那の文物』（大正７年，科外教育叢書刊行会）219頁

(注10) 『文字の研究』（昭和17年，森北書店）第三編，第一章 「支那古代の根本的研究について」1141頁，なお成美堂版（明治43年）は今回使用する能わず，再版本の森北書店版を本論考では使用した。

(注11) 注８前掲書，11頁

(注12) 注10前掲書，1309頁

(注13) 山田利明『中国学の歩み―二十世紀のシノロジー』（大修館書店，2000）102頁。ただし，山田氏は，後藤朝太郎の漢字研究には言及されず，「文字学でこうした総合的研究に着手したのは，岡井慎吾であろう。」（102頁）とされるのはいかがなものであろうか。

(注14) たとえば，白川静『字統』（1984，平凡社）666頁，「内」字の項参照。

(注15) 注７前掲書，32頁

(注16) 注10前掲書，1143頁

(注17) 『支那文化の研究』（大正14年，冨山房）15～56頁

(注18) 本論考では「漢学」批判のみ取り上げたが，漢文教育批判については『文字行脚』（昭和11年，知進社）付録二「漢文に興味あらしめよ」参照。

(注19) 日本儒教宣教会編，昭和９年６月発行

(注20) むしろ日本の中国への無理解が時には中国・中国人に対して差別感すら生じている現実を指摘し，中国の人の呼称問題をこの時期の朝太郎はよく取り上げる。「支那人」という呼称が日本人の間では侮蔑のニュアンスを含んでしばしば用いられること，日本国内でその名をもって呼ばれる中国人がニュアンスを文字上からその差別的に感じられること，つまり一つの国家の民を呼ぶ呼称が同じ漢字文化使用の国であるがゆえにいずれにしろある感情を生起させるのであれば，いっそのこと当時の国名にちなんで「民国人」と呼ぶことを提起する。（『支那料理の前に』55頁，『支那文化の研究』，「第三章 民国人より観たる日本人の欠陥」『日本より支那へ』等で積極的に民国人の呼称を文中に用いて定着をはかっている。）

(注21) 一例として『支那の文物』からみてみると，

民族性	属 性
「大規模を好む性情」（10頁～）	高調・濃厚・誇張性・大陸性
「形式を過重する性情」（14頁～）	虚礼・社交技術の発達
「極端なる利己主義」（21頁～）	根気・貯蓄を好む
「矛盾の感のある性情」（24頁～）	利己心と社会的事業の盛行・道教信仰
「金銭感覚の発達」（第二章「支那人の心理」）	
「楽天的生活」（第三章「支那人の楽天生活」）	楽天・文字の自家中毒・天運にまかせる諸項目が挙げられる。彼の中国論とそれとの対比によって得られた日本人論について詳しくは別に論じる予定。

(注22) 今回，第２章（支那通および後藤朝太郎評価）で，取り上げなかったが，後藤朝太郎を論じた論考に以下のものがある。いづれ再度この朝太郎の評価について検討してゆく予定。

(a) 三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」（『近代日本と中国』所収，1974，朝日新聞社）

(b) 劉家鑫「「支那通」後藤朝太郎の中国認識」（『環日本海研究年報，1993）

(c) 劉家鑫「後藤朝太郎の日中関係論」（『現代社会文化研究』第11号，1998，新潟大学大学院現代社会文化研究科）